

藤並の森

Vol.28

高知県立文学館



●「ハイキング（須崎市桑田山）」（写真提供／横田鐵喜）

リレー随筆㉙ 雨村先生の思い出 —— 横溝 亮一

人間、歳をとると、そぞろ、昔のことが懐かしくなる、という。私もその例外に漏れず、昨今、よく子供のころのことを思い出す。センチメンタルな私は、「ああ、あの楽しさ日々は、もう一度帰つてこないのか」と、吐息をついてしまうときが多い。

その懐かしい思い出の中で、ひとりわ、強く心に残っている人は、森下雨村先生と、江戸川乱歩先生、それに、「新青年」の編集長になられた水谷準先生であろうか。

神戸の薬屋の小倅として、店番をしながら、コッコツと書いた懸賞小説が当選し、それを評価して、そのころ、私の父・横溝正史の後をついで雑誌「新青年」の編集長になられた水谷準先生であろう。

そこで編集局長として、にらみを利かしておられたのが、森下雨村先生なのであった。父の思い出話によれば、雨村先生といえば、「泣く子もだまることなくわくて、出版界に名をとどろかせておられ、一方、翻訳もなされば、創作もなさる文人編集者であられたらしい。毎日二日酔いで出版社する父は、さぞかし先生にどうやされたことであろう。

しかし、雨村先生は、大人だけの世界ではいざ知らず、私のような子供には、優しい「森下のおじちゃん」だつ

た。昭和十四年から終戦の年にかけて、私ども一家は、東京武蔵野市の吉祥寺に住んでいた。森下先生ご一家は、徒歩十五分ほどの東京女子大の近くに居を構えておられ、私ども一家は、実にしばしばお邪魔した。すると、雨村先生はどてら姿で、満面の笑みをたたえて

「おい、こら坊主、元気にしているか？」と、私の肩を押して、居間のほうへ連れて行つてくださる。細面のお優しい輝夫人が、お菓子や紅茶などを運んで「亮ちゃんはいつもいい子なのねえ」と声をかけてくださる。そのうち、森下家の三人のお嬢さんと二人の男の子さんと入れ乱れて、芝生のお庭で、大騒ぎをして、夕暮れ時、お暇するのだった。

先生は、三十歳代で編集局長になられた異才であり、父は、まだ大した作品も書けずにいる青二才であったのに、先生は優れて包容力のある方だったと今にして思う。先生は、早稲田大学の英文科ご出身である。私はそのままの後輩にあたる。仕事の上でつながりはないけれども、偉大な先輩として、常々、私は先生を規範としている。

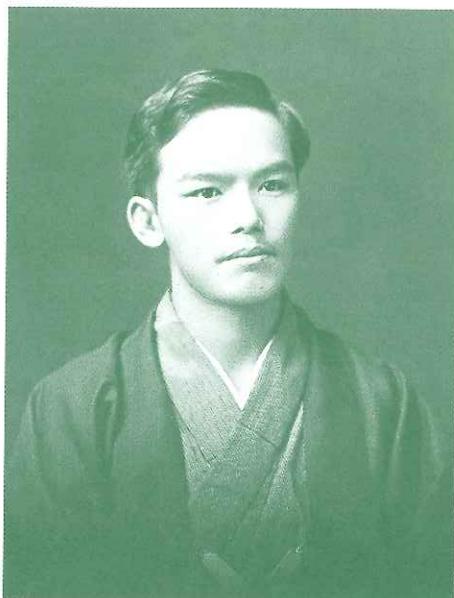
先生がなくなられたとき、私は父の代理として佐川に伺つた。日焼けしたお顔、禿げ上がつた広い額が光つて、笑みをたたえているような温顔に、私は涙が止まらなかつた。

（音楽評論家・横溝正史長男・東京在住）

◆春の企画展紹介◆

2005年4月21日(木)～6月2日(木)

「日本探偵小説の父 森下雨村」展



早稲田大学英文科時代、明治43、4年頃か

また、さまざまな事情がありますが50歳すぎに、東京での盛名をさらりと捨て、田舎で釣りと読書と農業に從事した後半の生き方も、釣り随筆『猿猴川に死す』とともに今日再評価されています。

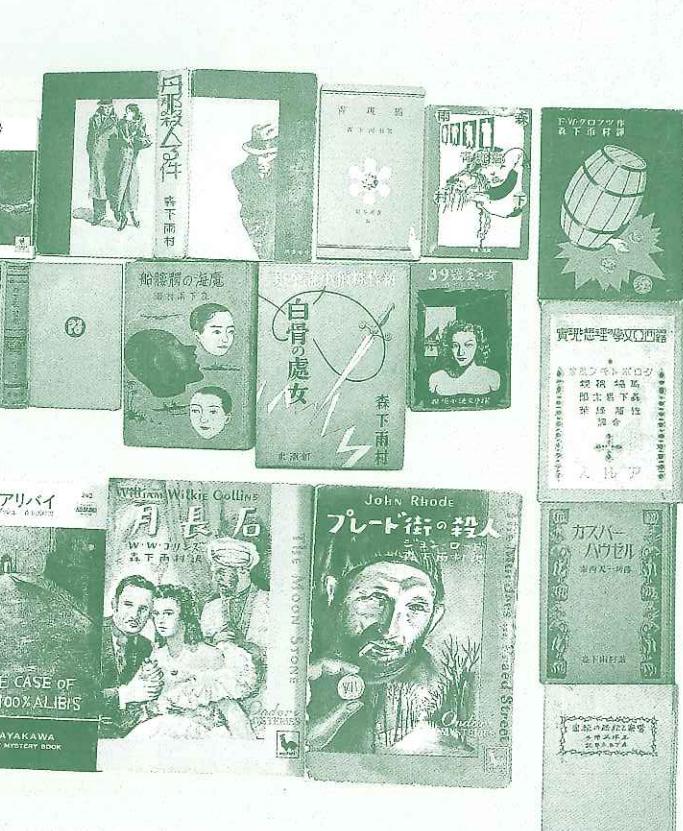
晩年、雨村は三女の昌子さんに自分が育てた栗林を見ながら「自分の人生でうまくいったのは、この栗ぐらいかな」とおぼえています。その若き日、青春のエネルギーを注いで日本の探偵小説を探偵作家を育てた日々の鮮烈な思い出は勿論語ったそうです。その若き日、青春のエネルギーを注いで日本の探偵小説を探偵小説「鬼想佛心」等ご令息横溝亮一氏のご協力あり)雨村が関わった大正・昭和の雑誌「少女の友」「潭海」「新青年」「探偵小説」らの雑誌、そして森下雨村の日記や未発表原稿、交流のあった牧野富太郎や田中光顕、高橋虎之助、その遺稿出版に尽力した『セルボーンの博物誌』の訳者西谷退三らからの書簡や写真、そして雨村に敬愛をこめて贈られた画家松野

大正9年創刊の雑誌「新青年」の初代編集長として江戸川乱歩を発掘、横溝正史ら多くの探偵作家を世に送り「日本探偵小説の父」と言われる森下雨村（1890～1965）は、生地佐川で昭和40年5月16日に75歳で亡くなりました。このたびの企画展は、彼の没後40年を記念して開催するものです。

大地主の後継者、児童文学作家、やまと新聞記者、雑誌王国・博文館の編集者、編集局長、海外探偵小説の翻訳者、探偵小説作家、そして後半生の漁師、篤農家——と様々な顔を持つ森下雨村ですが、一番の功績は、やはり編集者として「新青年」という魅力ある雑誌を産み出て、海外の名作探偵小説を広く大衆に紹介し、日本の探偵作家を育て、わが国探偵文壇を創設したことだと言われています。

江戸川乱歩は处女作「三銭銅貨」を初の日記（昭和40年5月17日）に「朝八時ごろ電報（電話にて）森下さんのご逝去の報入る。大ショック。涙、ボーダたり。親不孝をしていた僕が突然親を失つたような気持ちである。あちこちに電話で通報。亮一（注・長男横溝亮一氏）に十万円持たせて急行させた。胸のなかガランドウとなり木枯が吹き抜ける心地」と記しました。

昭和の探偵小説作家にして彼の庇護を受けなかつたものは一人もあるまい、とは昭和30年の文学辞典のことばです。



森下雨村の著書・訳書の一部

めで評価し励ましてくれた森下編集長から手紙を受け取った時の感激を、『学校の成績が一番と発表された時の喜びに似て、もっと強いものであった。その晩は興奮のために不眠症になつて、あれやこれやと嬉しい妄想に耽り、「私を不眠症にしたのである」とその回想録に記しています。

また横溝正史は、雨村の死を知った日の日記（昭和40年5月17日）に「朝八時ごろ電報（電話にて）森下さんのご逝去の報入る。大ショック。涙、ボーダたり。親不孝をしていた僕が突然親を失つたような気持ちである。

あちこちに電話で通報。亮一（注・長男横溝亮一氏）に十万円持たせて急行させた。胸のなかガランドウとなり木枯が吹き抜ける心地」と記しました。

昭和の探偵小説作家にして彼の庇護を受けなかつたものは一人もあるまい、とは昭和30年の文学辞典のことばです。

また、さまざまな事情がありますが50歳すぎに、東京での盛名をさらりと捨て、田舎で釣りと読書と農業に從事した後半の生き方も、釣り随筆『猿猴川に死す』とともに今日再評価されています。

本展では江戸川乱歩や横溝正史、徳島



昭和4年、「世界探偵小説全集」発刊記念写真 左から3人目より、森下雨村（博文館編集局長）、松野一夫、江戸川乱歩、延原謙、田内長太郎

さて、今回の森下雨村展開催及び出展資料については、三女二男のお子たちのうち、今日ただ一人のご生存者であられるご次男・森下時男氏（昭和4年生まれ、元名古屋テレビ放送専務取締役）のご協力に負うところが大きいことをご報告申

たまきました。

昭和4年、「世界探偵小説全集」発刊記念写真 左から3人目より、森下雨村（博文館編集局長）、松野一夫、江戸川乱歩、延原謙、田内長太郎

一夫や横山隆一の絵もご紹介します。雨村ゆかりの釣り竿や魚籠など後年親しあな釣りの世界、すなわち遺作となつた「猿猴川に死す」にまつわる資料や写真も加え、自然の中で野人としての自由な生き方、飾らない人柄、人間心理の深奥に迫る人生観にも触れていただけるよう準備を進めています。雨村釣り竿については、それをご保存下さった「猿猴」こと横畠義喜氏のご次男横畠公臣との出会いがありました。

さて、今回の森下雨村展開催及び出展資料については、三女二男のお子たちのうち、今日ただ一人のご生存者であられるご次男・森下時男氏（昭和4年生まれ、元名古屋テレビ放送専務取締役）のご協力に負うところが大きいことをご報告申

ました。

しかし退職後の月日を雨村研究に注がれ、東京ほか各地の図書館・文庫・資料を博搜、研究を進めてこられました。そして肉親という立場を離れ、客観的に見て、やはり森下雨村が後世に語り伝えるだけの業績を残した人物であることを確信され、没後40年記念展の希望を遂に洩らされました。そして遺された資料の吟味と整理、実証的研究に基づく雨村伝を探みられ、なおかつ散逸した資料を探して高価な東京の古書店資料を購求され収集されたのです。

一個の文学者・編集者、

語学に堪能だった雨村の血を受けアメリカで活躍中の孫さんが、企画展開催については「森下雨村といふても、もう誰も知らん、展覧会やつても人が見に来るかしら、文学館に迷惑かけるのでは」と慨嘆、遠慮してこられました。

しかし退職後の月日を雨村研究に注がれ、東京ほか各地の図書館・文庫・資料を博搜、研究を進めてこられました。そして肉親という立場を離れ、客観的に見て、やはり森下雨村が後世に語り伝えるだけの業績を残した人物であることを確信され、没後40年記念展の希望を遂に洩らされました。そして遺された資料の吟味と整理、実証的研究に基づく雨村伝を探みられ、なおかつ散逸した資料を探して高価な東京の古書店資料を購求され収集されたのです。

土佐の自然を愛し、この土佐で農夫としてその生を終えた「日本探偵小説の父、森下雨村」について、より一層の理解を深めていただけますよう願つてやみません。皆様のご来場ご観覧をお待ちしております。（別役佳代）



稻を刈る森下雨村、昭和30年代か



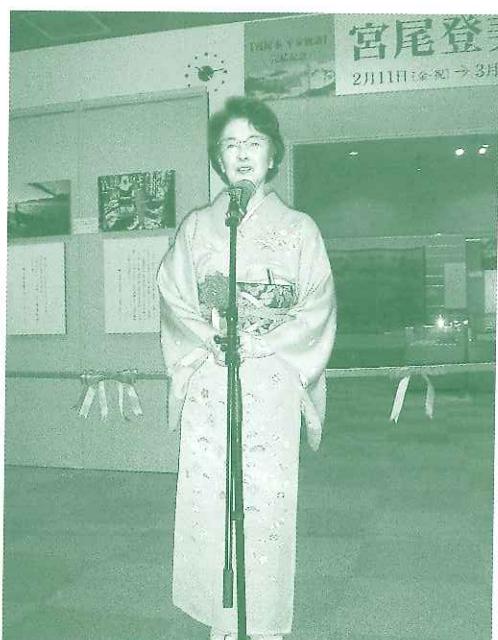
小学館文庫 600円 平凡社ライブラリー 1,155円 岳洋社刊 1,529円

<主な展示資料一覧>

- 郷里 佐川資料・森下家資料（古写真、「霧生閣」ほか）
- 森下雨村あての海野十三・江戸川乱歩・横溝正史・松野一夫からの書簡や色紙（未発表含む）
- 雑誌「新青年」「探偵趣味」「探偵小説」「ぶろふいる」「シャングラン」「少女の友」「少年俱楽部」「譚海」「月刊高知」他
- 小酒井不木・横溝正史ほかあて森下雨村書簡
- 横山隆一、松野一夫、清水豈直筆の絵画
- 雨村愛用の釣り道具、園芸・果樹栽培に関する資料
- 『猿猴川に死す』直筆原稿ほか関連資料や写真
- 森下雨村の未発表原稿や翻訳草稿他 計約150点

学芸員メモ

「宮尾登美子の世界展」雑感



オープニング式典で挨拶をされる宮尾先生

高知県立文学館では、二月十一日（金・祝）～三月二十一日（月・祝）まで、「宮尾登美子の世界展」を開催した。一日の平均入館者数は、二〇五名。連日、多くの皆様に足を運んでいただき、文学館は、久しぶりに活気に満ちていた。

二月十一日（金・祝）のオープニング当日のスケジュールは、宮尾先生にとつて、無謀ともいえるほどハードなものとなつた。午前十時からオープニング式典、十一時から記者発表、午後一時から記念講演会、四時からサイン会、夜は、先生主催の懇親会等々。

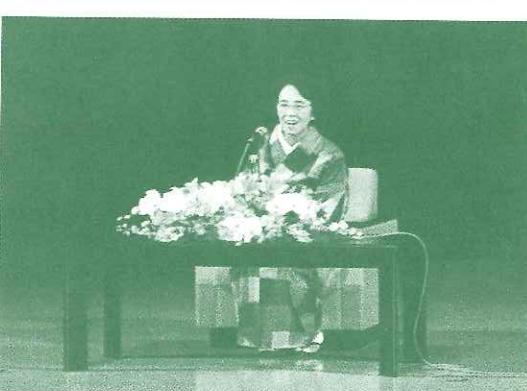
一五〇人集客予定であった、文学館一階ホールにおける記念講演会には、申し込みが殺到。受け付け開始二日間で三〇〇人を超えた急遽、場所変更を迫られた。そして、高知新聞社の配慮で六〇〇人収容できるRKCホールを手配いただいたのである。講演会は、超満員となり、「権」から「平家物語」へ」という演題で、和やかな雰囲気の中進められた。

すべてが大盛況の内に幕を閉じた「宮尾登美子の世界展」オープン初日だったが、ハードなスケジュールに心配していた通りの結果を招いてしまった。宮尾先生が、三十年ぶりという風邪をひかれてしまったのである。四日後、龍馬空港に

火をきられた。その後作家への道のりや「宮尾本平家物語」が完結するまでのご苦労などを笑いを説く、先生独特の土佐弁を交えて語られた。涙あり、笑いあり。会場は、大いに盛り上がった。

ところで、オープニング式典では、縁起のいい、友禅の宝づくしの着物に身を包まれた先生だが、講演会では、高知在住の方から贈られた、紬の着物をお召しになつた。慎ましやかな清楚な装いだったが、薄いブルーとグリーンの色合いがライトに映えてとても美しかつた。後に聞いた話だが、先生のファンというその方は、ステージに上がられた先生を見て、涙を流して喜ばれていたそうである。

また、一週間後の二月十九日（土）「文学館朗読の会」を開催した。「宮尾本平家物語をよむ」と題して、第一部では、毎日のように確認の電話をかけた。先生ご自身が出なければ良いのに、すべてご自分でお取りになる。よけいに申し訳なく思つた。数日後「津田さん、今回は、二十四日（壇ノ浦の戦い）」「最後に笑う人は」を朗読。第二部では、香川県在住の薩摩琵琶鶴田流奏者 岡本鶴秀さんが「那須の与一」他を演奏してくださつた。この朗読の会も人気を博して、一五〇人集客の文学館のホールに何と気が付ければ、三〇〇人を超える人々が押し掛け、立ち見は勿論、廊下で聞き耳をたてておられる方もいらっしゃる程だつた。二月だというのに冷房をかける程の熱気の中、出演者も観客も汗を拭きながらのステージとなつた。



RKCホールでの「宮尾登美子の世界展」記念講演会

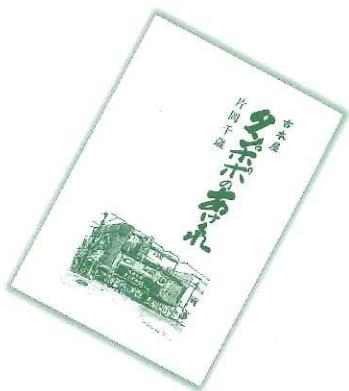
私は折れて抗生素質を飲みましたよ。まだくたばるわけにはいかん。今年は、講演も三十四回以上予定がはいつちゅうきね」先生独特的土佐弁が電話の向こうから返ってきた。そのお陰か、この後、日に日に良くなられていく様子が電話の向こうから伝わってきた。やっと私は緊張から解放された。「先生、お加減はよろしいでしようか。高知の展覧会は、連日多くの方が足を運んでくださり、じっくりと展覧会をご覧くださっていますよ」とご報告申し上げた。「そうかねえ。よかつたね」嬉しそうな声が繰り返し返ってきた。

私は折れて抗生素質を飲みましたよ。まだくたばるわけにはいかん。今年は、講演も三十四回以上予定がはいつちゅうきね」先生独特的土佐弁が電話の向こうから返ってきた。そのお陰か、この後、日に日に良くなられていく様子が電話の向こうから伝わってきた。やっと私は緊張から解放された。「先生、お加減はよろしいでしようか。高知の展覧会は、連日多くの方が足を運んでくださり、じっくりと展覧会をご覧くださっていますよ」とご報告申し上げた。「そうかねえ。よかつたね」嬉しそうな声が繰り返し返ってきた。

私は折れて抗生素質を飲みましたよ。まだくたばるわけにはいかん。今年は、講演も三十四回以上予定がはいつちゅうきね」先生独特的土佐弁が電話の向こうから返ってきた。そのお陰か、この後、日に日に良くなられていく様子が電話の向こうから伝わってきた。やっと私は緊張から解放された。「先生、お加減はよろしいでしようか。高知の展覧会は、連日多くの方が足を運んでくださり、じっくりと展覧会をご覧くださっていますよ」とご報告申し上げた。「そうかねえ。よかつたね」嬉しそうな声が繰り返し返してきた。

私は折れて抗生素質を飲みましたよ。まだくたばるわけにはいかん。今年は、講演も三十四回以上予定がはいつちゅうきね」先生独特的土佐弁が電話の向こうから返ってきた。そのお陰か、この後、日に日に良くなられていく様子が電話の向こうから伝わってきた。やっと私は緊張から解放された。「先生、お加減はよろしいでしようか。高知の展覧会は、連日多くの方が足を運んでくださり、じっくりと展覧会をご覧くださっていますよ」とご報告申し上げた。「そうかねえ。よかつたね」嬉しそうな声が繰り返し返してきた。

から 覧 閲 室



平成十六年度第四回高知県出版文化賞受賞

『古本屋タンポポのあけくれ』

片岡 千歳著

約四十年にわたり高知市で古書店を営んできた片岡千歳氏のエッセイ集。

一九六三（昭和三八）年、夫君と共に始めたタンポポ書店は、旭駅前通り、中ノ橋（本町）、南はりまや町と店を移し、現在は目録で古書の販売を行っている。

中村書店（東京）のような詩集専門店

を目指した創業当時の話、高知ゆかりの本への想い、人との出会いや古書のエピソードなど、もの柔らかな文章で丹念につづられ著者の人柄がじみ出ている。

図書館は「本を借り出して自分の身に引き寄せ」、文学館は「一人の作家や詩人の世界へ誘う工夫や仕掛け」があると、「古本屋は街のなかにあって、小さくとも文学館と図書館をもつとも手近に併せ持つものでありたい」の一文は、古書店としての気概を感じさせる。

白地のかバーを取ると、表紙の鮮やかな山吹色が目を引く。シンプルな造本ながらシロバナタンポポを想起させる装丁の工夫も楽しい一冊。

（郁）
二〇〇四年二月十五日発行

事だが、朝日新聞社、高知新聞社、二社が同時主催をしてくれたのである。これまで当館では、独自に展覧会を開催することが多かつたが、今回は三者が主催となつた。連日の報道協力のお陰である。また、二社の担当者が自分の展覧会のように動いてくれたことも大きかった。

たとえば、当初予定していなかつた、ビデオ上映会がある。これは、朝日新聞の高知版に十回シリーズで「宮尾登美子の世界展」の資料紹介をさせていただきたことがきっかけとなつた。「先生の映画が上映できないだろうか」来館者から声が揚がつた。文学館では、以前「権」を上映したことがあつたので、今回は、別映画をということになり、単行本、文

庫本で一〇〇万部を突破したという、一九九五年の日本アカデミー賞十四部門の内、十三部門を受賞した、文部省選定の「藏」を上映することに決まつた。また、自腹をきつてもやりたいという、熱心な朝日の担当者のお陰で上映権料も朝日新聞社が支払ってくれることになつた。上映会は、三月十一日、十二日、十三日と三日間連続で好評を博した。

今回、沢山の方の協力を得て、とても華やかな展覧会となつた。これも、人気作家宮尾登美子ならではのことである。『宮尾さんはいつおいでですか』「宮尾先生に連絡を取りたい」という問い合わせが多く寄せられた。今まさに「時の人、宮尾登美子」を痛感した。

また、ミュージアムショップでは「宮尾登美子の世界」仁淀川などを筆頭に先生の著書が多く売れた。終いには、書店から出版社に注文した数の半分しか入荷できなかつたそ�である。館での滞在時間、平均一時間三十分。まず、ゆったりと展覧会をご覧いただき、そして、お日当の本をじっくり読んで頂く。文学館として、理想の流れが描かれた。

最後に、入館者数八九五九人。開館してから、これまでの最高であった「智恵子抄展」の入館者数を抜いたことを付け加えておきたい。皆様に心よりお礼申し上げたいと思う。

（津田加須子）

県内同人誌紹介



『みづき』

平成九年発会の同人誌です。春四月・秋十月の年二回刊行。現在の号数は十七号で、同人もたまたま十七人です。

ジャンルは、小説・随筆・評論・史談・

テーマ隨想・詩・短歌・俳句・今回加入者の脚本が加わり、小なりと言えども内容・

体裁を整えています。同人に画家数人もおられ、表紙・カット等も充実し、今号は

二期会入選作品で飾ります。

毎月または隔月第二土曜日に集まり、校正・編集そして合評会、時に行楽を交

え同人は実に仲良く会の運営も民主的で

す。安芸班・香美南国班・高知春野班・

県外班や編集委員会・校正部も機能して

います。

同人は五十代から八十年代で、趣味ながらそれぞれ書く技能を高め、生きることを楽しんでいます。価格￥500です

に作品を製本した同人も相当います。

（郁）
二〇〇四年二月十五日発行



拍手に送られて会場を去る宮尾先生

仁淀川の川舟

—中野武彦のふるさと原像—

猪野
陸



仁淀川上流

作家が力をこめて書き残すものは、ふるさと原像といつてよからうか。中野武彦もそんな一人だった。中野武彦といつても、今は知る人も少ないが、眼下に広がる仁淀川の見下ろせる能津村宮ノ谷、今の日高村に生まれた。海南中学を出て上京、早稲田を経て作家を志した。

昭和十七年、「文芸復興」に書いた小説「訪問看護」が上半期芥川賞候補となった。この期の候補は、ほかに石塚友二の「松風」、中島敦の「光と風と夢」がなつた。三作ともすぐれた作品であったが、いずれも時局的でないという理由で落とされた。昭和十七年といえば太平洋戦争に入つており、賞も戦意高揚もの、時局的なものに傾いていく時代であった。

戦天下は紙の統制で同人誌も許されなくなり、日本青年文学学者会の「日本文学者」一誌に統合されていくが、それに「親子面会」などを書いた。戦後も「日本文学者」や「政界往来」などに仁淀川をめぐる名品を書いた。

中野武彦は明治四十三年に生まれるが家庭は仁淀川の川舟運搬だった。むろんダムなどない時代で、水量豊かな仁淀川を、こうぞ、みつまた、木炭、薪などを積んだ川舟が製紙本場の伊野へ下った。それには貨物をとつて人も載せた。伊野の舟付場はにぎわい、商いがすむと、帰りは雑貨を積み、川沿いの店屋におろしながら帆をかけて上つた。中野武彦の子供の頃から心に沈みこんだ郷愁の光景だった。

戦後まもなくの昭和二十一年二月号の「日本文学者」に中野武彦は「木の香」を書いた。戦争末期、母子がふるさとへ疎開していく。少年は村の少年と仲よくなり、禁じられた川へ行くようになる。

川上からは土佐湾米軍上陸にそなえて沿岸警備用軍材が流れてくる。少年たちはこれを筏に組み流れにのる。たちまち激流に呑み込まれ少年は見えなくなる。村人

の総動員で少年は翌日、二十五メートル水深の淵から引きあげられる。村の暮らしと疎開一家、川のこわさを書きあげた小説だった。

「川船は部落前の河原を離れると間もなく矢の様に流れて第一の難所である滝の宮の深淵に浮かんだ。切り立つた数十丈の屏風岩が数百米に延び広がり、水流は此の岸壁に激突して堰切られ、大きく渦を巻いて広く遠く淀んだ」。魔の淵といわれ、上流の早瀬からこの深淵に舟を苦もなく乗り入れるのは老練の船頭だけだったという描写がある。

「政界往来」にも「故山慕情」などを書いていた。ノショウ舟といわれる川舟時代、「乗せよう」からくるノショウ舟は奥地と伊野を結ぶ足だった。戦後になつて消えたが、舟が近づくとラッパが聞こえる。人はそれに乗る。中野武彦もその貨舟が、戦前、戦中、高知、東京への行き帰りの足だった。

やがて対岸の県道を上八川へバスが通るようになり、戦後は木材搬出もトラックに変わった。時代とともに川舟の役割は終わった。その時代を中野武彦は愛惜こめて小説に書きあげた。

戦後十年ばかりして脳溢血で倒れるが回復、左手で原稿を書き、戦前の同人誌「風祭」を復刊して、これにもふるさと周辺を連載した。昭和五十二年、六十六歳で他界、骨は東京から帰り、仁淀川の見下ろせる墓地に眠っている。

これらの雑誌に発表されたままの仁淀川作品を、だれか一冊にする人はいないものかとひそかに思ってきた。まとまれば、ふるさと名品として残るものである。こういう埋もれた作品を、よみがえらせていくのも文学散歩ではあるまい。上流のいくつものダム、砂利とりで仁淀川もやせた。それでも広い川は四季それに夕陽に映えてゆったり流れれる。いまでも名品の場所に行いました。文壇処女作となる

「小松弘夢」「高知詩集2004年著刊」「井出幸男」「土佐日記を歩くタリア文学運動史」「猪野陸著刊」他▼林亮・「句集」高知抄 林亮著刊▼井出幸男・「土佐日記を歩くタリア文学運動史」猪野陸著刊

男・橋本達広 高知新聞社▼俳誌「壺」発行所・芭蕉の風 V 杉本恒星 俳誌「壺」発行所他▼横田晴光・「陽暉樓 宮尾登美子 筑摩書房」他▼猪野幾久子著刊▼山崎福廣「吉井勇」こころの軌跡 山崎福廣山崎登輝子▼山岡千枝子・「一粒の砂」山岡千枝子著刊▼嶋岡辰・「詩集カウントダウン 嶋岡辰著刊」▼妻鳥季男・「別子開坑二百五十年史話」住友本社編刊他▼中村紀美子・「鷗外全集」一卷(三十八巻)集▼鷗外 岩波書店他・森鷗外(一八六二~一九二二)は明治・大正時代の小説家、伝記作家、劇作家、評論家、翻訳家、衛生学者、軍医。近代日本の代表的知識人。本名は林太郎。文久二(一八六二)年、石見国鹿足郡津和野城下の町田村横堀(島根県鹿足郡津和野町町田)に父静泰、母ミ子の長男として生まれました。東京大学医学部を卒業、軍医として明治十七(一八八四)年から二十一年までドイツに留学。留学中は文学、哲学、美学、芸術にも広く関心を寄せ、その後の幅広い文学・評論活動の基礎を養いました。帰国後はジャーナリズム活動に熱心に取り組み坪内逍遙ら多くの人々と論争を盛んに行いました。文壇処女作となる

高知県立文学館カレンダー

2005年

4～6月

4月—April

5月—May

6月—June

催しもの

専門講座 会場：高知城ホール
4月30日(土) 13時30分～15時
「モンタンヨーラのヘッセ」
—展覧会に寄せて—
コーディネーター 高松源一郎
★受講無料。申し込みは文学館まで。

専門講座 会場：高知城ホール
5月28日(土) 13時30分～15時
「ドイツ文学とヘッセ」
—ヘッセ入門—
愛媛大学法文学部人文学科
ドイツ現代文学論教授 安藤秀國

専門講座 会場：文学館ホール
6月25日(土) 13時30分～15時
「ヘルマン・ヘッセ」
—詩人・小説家への道—
高知大学人文学部人間文化学科教授 濑戸武彦

—江戸川乱歩を発掘、横溝正史らを育てた—

日本探偵小説の父 森下雨村展

2005年 4月21日(木)～6月2日(木)

(※5月30日(月)のみ休館)

<料金>一般550円(常設展含む)、高校生以下と高知県・高知市の長寿手帳所持者等は無料。

20名以上の団体は440円。

<場所>高知県立文学館1階ホール

<開館>9:00～17:00(入館は閉館30分前)
※なお、6／1を除く毎水曜日は19:00まで開館

●佐川町出身で、大正9年創刊の「新青年」初代編集長、森下雨村(1890～1965)の没後40年を記念しての企画展。未発表原稿のほか、乱歩・正史や松野一夫や海野十三などの貴重な書簡や絵や写真を出展。

●また、帰郷後の農夫としての後半生と愛した釣りの世界(遺著『猿猴川に死す』)も紹介。



【休館日】5月—30日 6月—6, 13, 20, 27日

お知らせ ●土佐山内家宝物資料館の展示 ●平成17年から18年にかけて当館で土佐山内家宝物資料館の資料展示を行います。

国宝と重要文化財 —古今和歌集高野切本・太刀兼光・長宗我部地検帳—

4月2日(土)～5月29日(日) 午前9時～午後5時

※会期中無休。毎週水曜日は午後7時まで開館します。
 ※料金：一般400円(少しお得な文学館展示とセット料金もご利用下さい。)
 4月2～4月20日=600円 4月21日～5月29日=750円
 ※国宝展示は4月2日(土)～10日(日)、26日(火)～5月8日(日)の期間のみ
 上記以外の期間は複製の展示となります。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 每週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。(上記参照)
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
〒780-0850